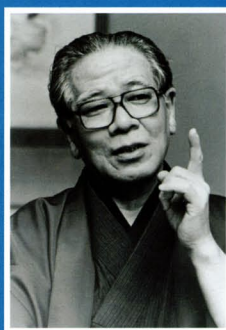


池波正太郎 作品ゆかりの地を訪ねる



池波正太郎について



時代小説やエッセイなど多くの作品を残した作家・池波正太郎は、大正12年1月25日、旧浅草区聖天町61番地（現台東区浅草7丁目3番付近）で誕生しました。関東大震災で被災し、一時埼玉浦和市に疎開しましたが、その後も少年期、青年期を台東区内で暮らしました。戦後、下谷区役所（現台東区役所）の衛生課に勤務したこともありましたが、当時劇作の第一人者だった長谷川伸氏に師事し、昭和26年に劇団・新国劇のために書いた「鈍牛」という作品で劇界にデビューしました。新進の劇作家として注目される一方、小説を書くことも多くなり、昭和35年「錯乱」で直木賞を受賞。以後小説を主流にして信州の真田家を題材とした多くの真田もの、幕末もの、忍者ものなどを次々と発表していきます。42年12月には「鬼平犯科帳」の先行作「浅草御殿河岸」を、翌43年から鬼平シリーズの本格的な連載が始まり、47年には「剣客商売」「仕掛人・藤枝梅安」のシリーズ、49年からは大河小説「真田太平記」がスタートしました。その後はこの4作品を常に執筆し、さらに自身が最も好んだ江戸の町を舞台にした多くの時代小説、食べ物や、旅などを語る珠玉のエッセイなどに健筆を揮い、1000作を超える作品を残しました。江戸の名残が残る上野や浅草を少年時代の遊び場として育った池波は、常に下町の人々を代表するような視点で作品を構築し、思い出の地をたびたび舞台として描いています。平成2年5月3日、急性白血病のため惜しまれて急逝、「鬼平」「梅安」の最終作は未完となっています。

写真：但馬 一憲

池波正太郎生誕地碑

作家・池波正太郎の生誕地近くに位置する待乳山聖天周辺は作品の舞台としてもたびたび登場し、実際に地図をもってこのあたりを散策するファンも多くいます。これら池波ファンの期待に応えるとともに、池波正太郎記念文庫および池波文学を広く伝えることを目的として、区立待乳山聖天公園内に、池波正太郎生誕地碑が建立されました。

